二〇二二年五月二七日

御廟所の砦の松の緑立つ　なつき
花あげしかたばみなれば抜かでをく　董雨
大甕の浮葉隠れに目高の子　ぽんこ
観音のお顔に影す若楓　ぽんこ
通院の友に付き添ふ迎へ梅雨　む　べ
扁額の文字群青や寺涼し　よう子
湯上がりのややに全身天花粉　千　鶴
猿石の小首傾げる五月闇　明日香

二〇二二年五月二六日

龍神の守る石室木下闇　もとこ
山鳩のしわがれ声す夏木立　隆　松
広前は働き蟻の運動会　うつぎ
夜の喜雨大地に染みるごと音す　みきえ
車座を解きてそれぞれ三尺寝　ひのと
青山椒噛めば口中風渡る　凡　士

二〇二二年五月二五日

小流れの籠に鎮もるひね胡瓜　素　秀
向日葵の畑の迷路に迷ひけり　みきお
耕運機止みて静もる亭午かな　みきえ
はまなすや能登路の果てのランプ館　凡　士

二〇二二年五月二四日

烏賊の灯の沖にひしめく日本海　宏　虎
長靴に水汲み遊ぶ夏の庭　ひのと
三輪の郷見渡す限り麦の秋　明日香
長屋路地軒それぞれに額の花　凡　士
堂涼し龍の俯瞰す天井画　もとこ
泉汲む忽ち曇るボトルかな　うつぎ
舞殿の青葉明りに巫女の舞　なつき

二〇二二年五月二三日

かりゆしに袖を通して更衣　凡　士
雨しずく朝日に光る樟若葉　満　天
通し土間抜けてお庭の柿若葉　みづき
摺り足の聞こえて来たり夏料理　ひのと
風吹けば水の匂ふや杜若　素　秀
イナバウワーしてふらここを漕ぐ子かな　宏　虎
銀盆を手に白シャツの給仕かな　ひのと

二〇二二年五月二二日

麦秋を凹ませて風駈けゆけり　もとこ
窓若葉夫婦でハモるリコーダー　うつぎ
夕暮れの代田を走る電車の灯　智恵子
上向きに並ぶ蛇口や夏の午後　素　秀
火星への旅夢見る子夏の月　宏　虎
登るたびケルンに小石積み帰る　千　鶴
吊りてより海の風呼ぶ貝風鈴　ひのと
一望の植田に灯る屋敷林　凡　士
ガシャガシャと薬缶に氷畦を行く　智恵子

二〇二二年五月二一日

水鏡して巫女舞へる御田祭　うつぎ
畑あるじ寄りて愛であふ茄子の色　みきえ
黒揚羽ファションショウのごと舞へり　きよえ
梅雨の寺手に傘袋靴袋　せいじ
浜砂利を覆い尽くして昆布干す　あひる
せつかちの汝れとは見えず新茶汲む　もとこ
立ち漕ぎや半袖シャツを膨らませ　かえる
ひと雨にむらさき垂るる燕子花　凡　士

毎日句会みのる選・二〇二二年五月二九日